

5月例会報告

21世紀の生涯スポーツ---フットボールを楽しむために---

徳田仁（セリエフットボールネット）

第一部-----徳田仁氏のプレゼンテーション-----

■自己紹介■

93年の会社スタート当時は11人制サッカー合宿事業などを展開。95年秋からフットサル事業に取り組む。現在は海外サッカー観戦ツアーの企画運営なども。「見る人・やる人・働く人」をコンセプトに、フットボール情報や楽しみ方を提供する。先日行われたフットサルアジア選手権（バンコク）も現地で応援。

■国内フットサル事情■

【フットサル経験者の割合】

フットボール経験者100のうち40がフットサル経験者（うち20はフットサルのみ）。残りの60を取り込むことが日本のフットボール文化を広げていくことに繋がる。

【フットサル流行の裏にあるもの】

95～96年頃、フットサルは流行と言えるほどの広まりを見せる。それが現在まで廃れることなく続いているのは国内（特に大都市圏）のグラウンド事情が関連している。

<東京>11人制サッカーでは、芝はおろか土のグラウンドさえ予約できない。

<大阪、京都>東京と同じような状況だが、フットサルコートとプレーヤーの数は多い。ただしレベルは低い。

<福岡>大きなフットサル施設が昨年秋完成した。また、トヨタのオートキャンプ場内にもコートがあり、そこで大会を繰り返すうちに人が集まりだした。東京指向が強く、東京で流行りのフットサルが受け入れられている。

<名古屋>11人制グラウンドの供給が十分なため（2万円で芝のグラウンドが借りられる）、フットサルは全く根付いていない。

<札幌>インドアサッカー（サロンフットボール）競技人口は多い。彼らがフットサルに乗り換えようかという状況。40代などを対象とした年齢別の大会もある。

【人工芝の問題】

フットサル国際大会は体育館で行われなければならない（FIFA）。にも関わらず、日本のフットサルは人工芝で流行した。その理由。→日本でサッカーと言えば「芝の上で」というイメージ（願望）だ。人工芝メーカーがそれに目を付け、商品売るためにコートを作った。それも、砂の入っていない真っ青な美しい人工芝で（砂入りの4倍の値段）。こうして、フットサルは人工芝が当たり前、という現状が作られた。しかしスキルが上がってくると正規のルールに則った「体育館指向」が強くなっていく。

■海外フットサル事情■

【韓国】スポーツ用品メーカーが力を入れてバックアップしているが、まだ草レベルでフットサルが盛んに行われているという状況ではない。全体的なレベルも低く、強いチームはソウルに一つだけ（元 K

リーグ選手中心)。ただし、協会内にフットサル連合会という組織はある。また、中学部活→高校部活→Kリーグという進路になるため、クラブユース組織はない。日本よりフットサル普及は難しいかもしれない。

【中国】シャンハイだけは強いが、他の地域ではほとんどやられていない。サッカーの授業は中学の体育までで、高校以上は「足玉学校」へ引き抜かれエリート教育が施される。

【イングランド】例えばロンドンには天然芝のミニサッカー場（民間企業）がある。大きなところは20面を所有し、そこでFive-A-Side（5人制サッカー）やSeven-A-Side（7人制サッカー）をやる。クラブハウス、シャワー、バーなどを完備した施設で、休日はもちろん平日でも夜になると集まってきてボールを蹴る（照明完備）。生活スタイル、文化として定着している。

【イラン】サッカーのクラブがそれぞれフットサル組織を持っており、フットサルのプロリーグが行われている。もちろん選手は皆プロ契約。アジアで抜けた実力を持つのもそこに理由がある。

【ブラジル】イランと同じくクラブがフットサル組織を持つ。ビーチサッカー、フットサルはピラミッドの下の方に位置づけられ、そこから11人制へと引き上げられる選手もいる。ロナウドもその一人。

■フットサル普及に関して■

先日のアジア選手権では惜しくもタイに敗れてグアテマラ本大会の出場を逃した。これは普及という面からも大きな影響がある。非常に残念だ。代表チーム強化は協会の仕事だが、そこに参加する選手を草レベルで発掘していくのが私の仕事の一つだと信じている。また、フットサルは、象徴的な言い方をすれば、「体育」の枠を外れた初めてのスポーツだ。学校には部もほとんどないし、草レベルでの参加が多い。試合後集まって他愛のない話をしたり、お酒を飲みに行ったり、という雰囲気（イングランドのミニサッカー場のような）は体育では味わえないもの。こういうレジャー指向も「生涯スポーツ」の大きな柱として育んでいきたい。

第二部-----ディスカッション-----

■民間企業の役割と参加者のニーズ■

○首都圏には80以上のコートがあるが、これからも増えるのか？

→ソフトと運営力がなければ離れていく。コート経営をやめていくところも少しずつ出てきた。あと少し増えるかもしれないが、過当競争で値段が下がれば運営できないところが出てきて減るかもしれない。

○名古屋のような大企業の影響があるところで民間業者が生き残っていくのは大変だ。

○参加者は大会を「練習の成果を試す場」と捉えているのか、それとも「一回きりのイベント」なのか？

→最初は半々だったが、最近は前者が多い。全国大会の予選と捉えている参加者が増えている。

○ロンドンの民間競技場でも（名古屋のように）グラウンドが確保できないからフットサルをやるのか？

→コートの問題ではなくてメンバーの問題。11人集まるのは難しいが5人なら簡単。

○セリエではどのように審判を雇用しているのか？

→専属はいない。学生や他に仕事を持っている人が週末などの時間を利用してやっている。尚、運営等の専属スタッフは6人。

○韓国にチームを連れていくのはどういう思惑があるのか？ビジネス的な裏付けは？

→全くビジネスにはならない。利益ではなく、国際交流の場であり、外国の環境を知ってもらうことも大切だと思っている。

○年をとっても体を動かす場が欲しい。そういう年齢層を取り込むことが大切。

○コートを貸し出すだけではなくて、人が集まれる環境を提供したい。

■フットサル普及に向けて■

○学校の授業でフットサルを導入したら人気ができるだろうか？

→筑波大付属では授業に取り入れている。昼休の時間まで喜んでフットサルをしている状態。

○日本の体育館はバレーとバスケットに占領されている。割り込めない状況を打破していく努力が必要だ。マナーの向上も含めて。

○(マナーの話を受けて)フットサル参加者は外で裸になって着替えたりする。そういうイメージは妨げになる。特にテニスコートの脇ではやらない方がいい(笑)。

○フットサルはボールタッチが多く、フットボール初心者のスキル向上に適している。そういう初心者層を取り込む努力も必要だ。

→初心者だけの試合を組んでくれるフットサル場もある。

○フットサル普及に関して一番のポイントとなるのは何か？

→審判の問題。絶対数が足りない。協会にも4級審判員制度はない。

→協会もようやく4級審判制度を作った。これから都道府県に降りていくところだ。

○高校年代でも大会をやろうという話があるが、一番のネックは審判だ。絶対数が足りない。帯同審判制度を作るのが一番良い。

○チーム加盟する時に審判講習会受講を条件にする(兵庫県)のは良い方法だ。

○審判講習をする側の人数も足りない。講習会に引っ張り回されると自分のチームでの活動ができなくなる。これをうまくクリアしないと生涯スポーツとして定着させることは難しい。

○古い世代の人達は11人制にこだわりがあるが、世代が変わって今の人がおじいさんになった時は間違いなくフットサル人口が増える。

■サッカーかフットサルか■

○「生涯スポーツ」という点からすれば、サッカーかフットサルか、というのは問題ではない。ボールを蹴るという事自体が楽しいのだ。1-1でも楽しい。

○サッカーに比べてフットサルはテレビ映りが良くない。一つの画面で収まってしまうからスケールが小さい感じがする。見ていて面白くない。

○フットサルは引きの映像にしても選手が大きく映り、しかも両ゴールが一つの画面に入る。これはNBAのような感じでとても面白い。

○フットサルワールドカップの試合はすごく面白い。授業で見せると大騒ぎになるほど。

○海外では11人制もやるしフットサルやFive-A-Sideなどのミニサッカーもやる。日本人は無用な線引きをしてしまっているのではないか。

■芝と怪我の問題■

○人工芝は「砂無し」の方が良いのか？

→選手は6：4で「砂無し」を好むが、どちらとも言えない。雨で濡れれば滑るし火傷もする。

○アスファルトでも体育館でも怪我はある。個人的には寝ころんでも汚れない、囲いがあってボールが飛び出さない、というのが良い。

○怪我の統計はあるか？

→ない。保険の関係で把握できない。

■番外編■

○フットサルはルール変更が頻繁（年に二回ほど）。ルールが行き渡らないことが多い。新ルールはFIFAでは発表済みだが、JFAでは発表準備段階（ルールの和訳やビデオ作成などは終了しているが、慎重を期すために発表にはもう少し時間がかかる）。

クイズ（新ルールより）

問題1：ゴールクリアランスがノーバウンドで相手ゴールに直接入ったら得点になるか。

→答え「ならない」（参加者の半数以上が不正解）

問題2：ペナルティエリア内でGKが相手選手にスライディングタックルをしたらPKになるか？

→答え「ならない」（ほぼ全員不正解）

○フットボール選手は外で裸になる（着替える）が、それは後天的に習得された行動様式（更衣室がないという環境に適応するため）なのか、それとも、先天的にそういう人達がフットボールを選択するということなのか？

→答え「・・・」

校正者註：「サッカー」は11人制を指す。「ミニサッカー」はフットサル、Five-A-Side、サロンフットボールなどの総称として使用した。また、「フットボール」は「サッカー」と「ミニサッカー」の両者を含む上位カテゴリーである。

<初参加の感想（笛木寛）>

初めて参加させて頂きました。多種多様な方々がおいでになりましたが、いずれもフットボールに通暁されている方ばかりで、議論が進むにつれ「なーんにも知らないんだな、俺って・・・」と、自分の無知を自覚していくことになりました。しかし、中塚先生が時折発する面白話とその場の緊張を和らげ、アホな質問でもいいんだ、知らないことは何でも聞いてみよう、という雰囲気が形成されていく。メール通信ではかなり硬いイメージを抱いていたのですが、とてもリラックスして参加できました。プレゼンターの徳田さんをはじめ参加者の方々に改めて御礼申し上げます。ありがとうございました。こういう会合が月に一回も開かれているのはとても素晴らしいです。何らかの形でお手伝いできればと思っています。

そして、一番気になっていたのが「カリンカ」です。薄暗い部屋に紫色のソファ、エロティックな音

楽、タバコと香水の匂い……。そんな光景を思い浮かべていましたが、実際はおばあちゃんがビールと餃子を運んでくるとても気楽なお店でほっとしました。

<中塚の感想・意見>

今、東京都サッカー協会傘下の「東京都フットサル連盟」設立のための準備を進めている。私も検討委員の一人として、フットサル普及のための基本的枠組みをどう規約に盛り込むかに取り組んでいる。協会・連盟の在り方や組織の立ち上げ方も含めて、サロンで議論されたことは大変参考になる。

徳田さんも言うておられたが、大会を運営する際にネックとなるのは会場と審判の確保である。特にフットサルの普及を考えた場合、審判の確保は大きな問題である。審判の絶対数が少ないという、フットサル特有の課題もあるが、派遣か帯同かということになるとサッカーとも共通するテーマとなる。協会から派遣される審判のもとでプレーする方が「正しいフットサル」が楽しめるはずなのだが、「やってもらう」のだからその分経費はかかる。また、「審判は別の世界の人」という感じで、ともに楽しむ仲間とはなりにくい(ような気がする)。その点、プレーしている人たちが互いに笛を吹きあう(もちろん、自チームの試合ではなく、他の試合だが)方法は低価格で済むし、もともとプレーする仲間なのだからクレームも出にくい構造にある(ような気がする)。審判だけ独自に育成・派遣するのも大切だが、プレーする人が審判もする、つまり自前で審判を育成・発掘する方が、生涯スポーツとしてのサッカー・フットサルの普及には欠かせないと思う。

その一方で、審判は中立でなければならないという原則からすれば、利害関係のないところから派遣されるのが本当だろうとも思う。要はそれをどこから適用するかである。現実的には高校レベルにおいても、静岡県の高校選手権予選の決勝に東京都から審判が呼ばれように、中立性を確保するために(笛を吹いている人はいつも中立なのだが、色々クレームをつける人がいるので)気を使っているのである。

とにかく普及の段階では帯同審判でいってもらいたい。5月のある日曜日。筑波大学附属高校のグラウンドでは、インターハイ予選の都大会が行われていた。自チームはとっくの昔に敗退してしまった私は、会場校の教員として登校していた。これは別にかまわない。来ているのだから審判をするのもかまわない。けど、4試合あるうち3試合も出番があるのには参った。都大会に出ていないチームの教員で割り当てた結果そうってしまった(連絡ミスもあったが)のだが、そこには100人も部員がいるチームや、OBや親が大勢詰めかけてくるチームも来ているのである。彼らの中には審判ができる人もいるはずである。中立的立場とはいえ、会場校の教員がここまで面倒みなくてはならない現状には疑問が残る。出場するチームが自前で審判を育てること、あるいは審判を発掘することを前提として大会に参加することとした方が、サッカーをトータルで発展させる上でも有効だと思うのだがどうだろう。

ちなみにDUOリーグでは、「この試合の審判は筑波が担当」というように、クラブごとに割り当てている。教員がやっても高校生がやっても、あるいはOBや親がやってもかまわない。このようにすれば各クラブが選手だけでなく審判の育成にも目を向けるようになると思うのだが。

以上